

第6回教育委員会（定例）議事録

1 開 会

令和6年9月13日（金） 14時00分

2 場 所

市役所第2庁舎3階 2-301・302会議室

3 会議に出席した委員

教育長 丹後 政俊
委 員 西田 正志
委 員 鈴木 友美
委 員 吉良 佳晃

4 会議に出席した職員

学校教育部長 酒井 寛興
こども未来部長 田中 正典
社会教育部長 小林 康弘
学校教育次長 浅田 智広
教育総務課長 山内 俊秀
学校教育課長 小嶋 拓也
学 事 課 長 荒木 敏文
教育研究所長 足立 圭吾
東部学校給食センター所長 井上 尚和
西部学校給食センター所長 仁木 秀樹
子育て企画課長 山鳥 有史
保育教育課長 山田 康弘
社会教育・文化財課長 田中 和哉
中央図書館長 田中 真紀子
市史編さん課長 小島 理三
田園交響ホール館長 酒井 直隆
中央公民館長 竹見 朋子

5 議事日程及び議案

別紙の通り

6 開会宣言

14時00分

7 会 期

（自）令和6年9月13日 （至）令和6年9月13日 1日間

8 会議録署名委員名簿

西田正志委員

9 閉 会

15時52分

丹後教育長 全委員 丹後教育長	日程第 1、令和 6 年度第 5 回会議録の報告、承認について意見等はないか。 異議なし。 全員異議なしで、会議録をこのとおり承認する。
丹後教育長	日程第 2、会議録署名委員は、1 番西田正志委員を指名する。
丹後教育長	日程第 3、会期は令和 6 年 9 月 13 日、本日 1 日間とする。
丹後教育長	日程第 4、議案に移る。議案第 11 号「『令和 5 年度実績 教育委員会の点検・評価』について」、教育総務課に説明を求める。
山内課長	《議案書に基づき説明》
西田委員	参考資料 32 頁で、「～幼稚園で大事にしていることが違う～」との記述について、幼稚園の教育要領も保育園の保育要領も全く同じ領域であり、年齢は違うが大事にしていることは同じであり、違和感がある。
山内課長	外部評価者の意図としては、後述の「～市全体として育てたい幼児像を共有していく～」ことであつたと記憶しており、誤解を招かないように評価者に確認のうえ削除する。
西田委員	参考資料 34 頁で、「右のとおり変更」とあるが、右段に記述がないのはなぜか。
山内課長	⑦⑧⑨の質問については、前頁の右段に修正反映を一括して記述している。
丹後教育長 全委員 丹後教育長	議案第 11 号「『令和 5 年度実績 教育委員会の点検・評価』について」採決をする。異議はないか。 異議なし。 全員賛成で、議案第 11 号「『令和 5 年度実績 教育委員会の点検・評価』について」は原案どおり可決する。
丹後教育長	日程第 5、報告事項に移る。報告 1「寄附採納について」、教育総務課に報告を求める。
山内課長	《議案書に基づき報告》
丹後教育長	報告 2「後援名義の承認について」、教育総務課に報告を求める。
山内課長	《議案書に基づき報告》
丹後教育長	報告 3「小中学校児童生徒の問題行動等について」、学校教育課に報告を

	求める。
小嶋課長	《議案書に基づき報告》
丹後教育長	報告4「令和6年度9月小・中・特別支援学校定例校長会について」、学校教育課に報告を求める。
小嶋課長、足立所長	《議案書に基づき報告》
丹後教育長	報告5「第3次丹波篠山市子どもの読書活動推進計画の策定について（中間報告）」、中央図書館に報告を求める。
田中館長	《議案書に基づき報告》
西田委員	家庭、図書館、学校での課題をどのように捉えられているのか、教示願いたい。
田中館長	地域においては、例えばボランティアグループには図書館、学校での読み聞かせ等でお世話になっているが、それらグループにおける次世代の育成が課題となっている。家庭においては、スマートフォン等の普及による生活環境の変化で、読み聞かせの機会が減っていることもあるのではと考える。学校においては、色々な学習活動をしていく中で、読書活動だけに今以上の時間をとるということができないということが挙げられる。
西田委員	学校における司書教諭の配置状況は。
小嶋課長	後刻報告する（全ての学校に配置できているわけではないが、法的に配置が義務付けられている12学級以上の学校には配置している）。
西田委員	学校における蔵書の状況は。
荒木課長	附属資料1頁に掲載しているとおりである。
西田委員	図書費に係る学校予算について、算定の基礎はあるのか。
荒木課長	基本的には、学級割及び人数割で予算を組んでいる。
西田委員	国が示す図書標準については、一定の指数ではあると思うが、実際に活発な学校図書館は、ボランティアの方がしっかりと動いているところであると思うので、必ずしもそこだけにこだわる予算であってはいけないと思い、確認した。
丹後教育長	報告6「教育長報告」について報告する。 前回の定例教育委員会以降のスケジュールについては11～12頁に記載している。学校園訪問の後半を実施してきたが、この訪問を通して非常に充実した保育、教育が行われていることを確認、安心するとともに、地域の特性を生かした教育、これからの社会で子どもたちが必要とする力の育成に向け

た取組を進めており、着実に進展していることをしっかりと発信していきたいと思っている。

また、不登校の子どもたちの学校以外の居場所として、ゆめハウスやサポートルーム、フリースクール、アグリステーション等を訪問してきた。そこでスタッフや子どもたちと話をしてきた。居場所があることで子どもたちは元気を取り戻し、自分の歩み始める等の実態を見てきた。学校の教育効果は非常に高く、そこへ戻すことも大事ではあるが、それだけではなく、現状に応じた居場所や学びの場を確保し、最終的には社会的自立に向けて支援ができるように取り組んでいく必要があることを再確認した。

次に、9月の校長会では、「つながりを煽られる子どもたち」という本より、つながり過剰症候群を紹介した。簡単に説明すると、現在の日本社会は価値観が非常に多様化しているが、戦後から高度経済成長、バブル期の頃までの価値観は大きな変化がなかった。例えば、有名大学を卒業して有名企業に入り、何歳で結婚、何歳までに家を持ち、定年まで勤める等の価値観で生きてきたが、バブルが崩壊し1990年代以降になると、入社した企業で最後まで勤めるのではなく転職もある、結婚する、しない、子どもを持つ、持たない等、非常に多様化した価値観の社会に変わってきている。そうした多様な価値観がある社会で多様な生き方が認められて、人生の選択肢が増える一方で、安定した人生の羅針盤、基本の考え方がなくなったことで、周りの人の評価を基にすることになった。スマホやICTが普及する中、絶えずつながり、自分が発信したことに反応してくれるかどうか、すぐに既読になるか等、周りの目が自分の価値観の標準基準になることで、常時つながりを求めることを「つながり過剰症候群」と定義されている。昔はそういう価値観から外れた人は「一匹狼」と言われていたが、今は「一人ぼっち」と否定的に捉えられたりすることで、絶えず誰かとつながっておかなければという逆のプレッシャーがあることが書かれており、気をつけておくべきと思った。また、いじめの根底に潜んでいるものということで、協調性が強調され、一致団結すべきとつながりを求め、日本は一つ等、絆を言われることは悪くないが、それが強調され過ぎると、そこに入っていけないことで自己否定感を高めたり、多様性を否定しかねない圧力になってしまう。こうしたことから、内部の閉じた強固な結束ではなく、緩やかに外部へと開かれたつながりや、他者と適度なつながりを保ちつつ、その中で同時に多様性を大事にして確保していくことが大事であることを書かれており、私もそう思うので報告をした。

以上で、本日の審議は全て終了する。

これをもって、第6回定例教育委員会を終了する。